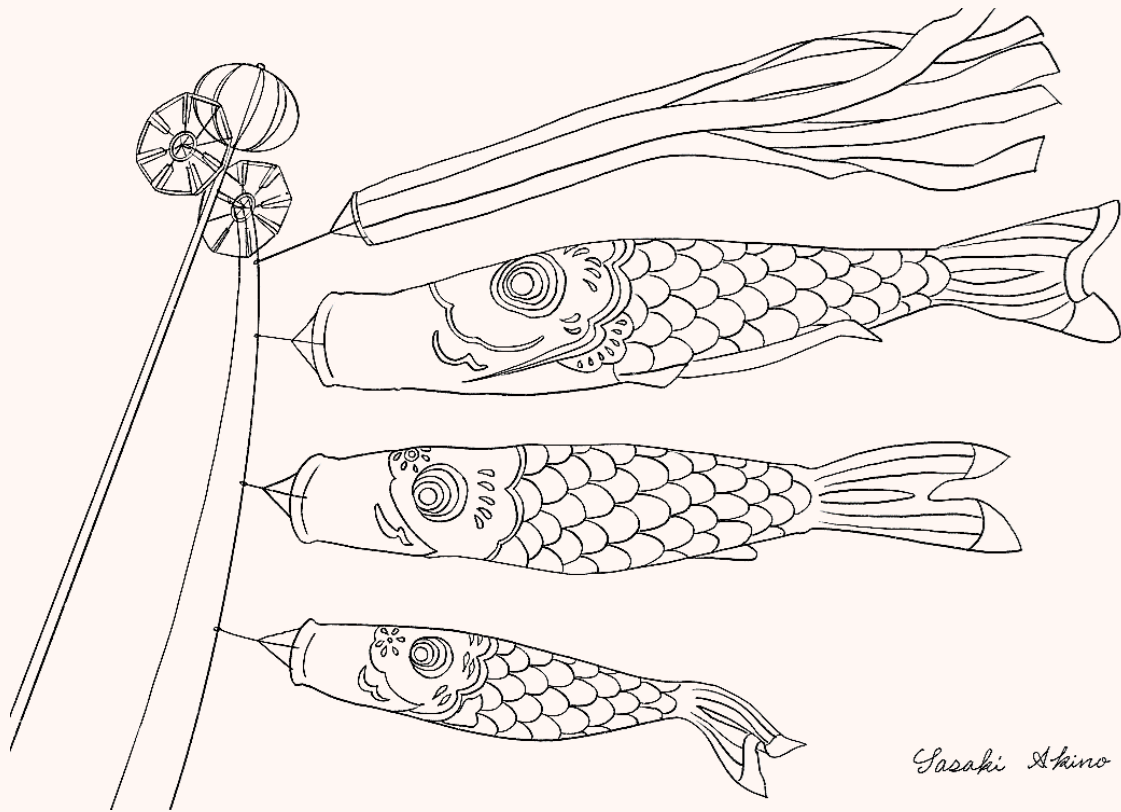


## 5月5日 子どもの日



(Drawn by Akino SASAKI)

子どものころ、僕たち家族はとても小さい家に住んでいた。生まれたときから、僕には父親がいなかった。母親は僕を祖父にあずけて、外に働きに出ていた。祖母も外で働いていて、あまり家にいなかった。僕の小さいときの記憶の中心は、いつも祖父だった。

祖父は僕をかわいがってくれた。祖父は家族の中で一番器用で、作るのが大変なお菓子などもよく作ってくれた。特に、あんこの入った和菓子作りが得意で、毎年5月5日の子どもの日には、柏餅を作ってくれた。

僕の住んでいた田舎のほうでは、男の子が生まれた家には、必ず鯉こいのぼりがあった。男の子が生まれたら、親戚がお祝いに鯉のぼりを贈る習慣があったからだ。近所の男の子のうちの鯉のぼりはたいてい、柱の一番上に矢車やぐるまがついていて、吹き流しの下には、黒、赤、青のそれぞれ三色の鯉のぼりがセットになっていた。吹き流しの下で、三匹の鯉が楽しそうに空を泳ぐ。一番大きい黒がお父さん、次に大きい赤がお母さん、そして、小さい青が子ども。それは普通の人考える、理想的な家族の姿だった。

僕が住む小さな家にも、鯉のぼりがあった。でも、それは他の家のはちよつと違っていた。まず、一匹だけの赤い鯉のぼりだった。しかも、とても大きい鯉のぼりだった。なぜ、そんな大きくて一匹だけの赤い鯉のぼりだったのか、わからない。とにかく、それが僕のための鯉のぼりだった。

その赤い鯉のぼりは、大きすぎて、よほど強い風が吹かないと空を泳ぐことがなかった。だから、風がないときはだらりと大きな体をぶら下げて、ほとんど動かなかった。その鯉のぼりはあまりに大きかったので、しっぽが地面に着くぐらいだった。小さかった僕は、そのしっぽを引っ張ったり、体に巻き付けたりしてよく遊んだ。



「あ！ もう、こんな時間！」

時計を見て、僕は心の中で思った。今は、午後 5 時 10 分。いつもは会社を 5 時 30 分に出るのに、今日は遅くなってしまった。もちろん、やるべき仕事を片

づけていたら遅くなったのだが、僕の心の奥深くには、うちに帰りたくないという気持ちもあった。

僕は先月 50 歳になった。83 歳の母親と二人暮らしだ。結婚はしていない。母親と二人だけの生活に、何も問題はなかった。僕が仕事で遅くなっても、母親は一人で晩御飯を食べて、テレビを見て、お風呂に入る。僕がうちに帰り着いたときには、母親はベッドで先に休んでいた。特に手間のかかることは何もなかったのだ。

そんな生活が変わり始めたのは、3 年前だ。母親の様子が少しずつ、おかしくなっていた。最初はどこに眼鏡を置いたかを忘れるとか、親戚の人の名前が出てこないとか、そんな小さな物忘れだった。でも、忘れることがどんどん多くなっていった。

そんな母親を見ていると、僕はいろいろと考えてしまう。いつまで母親をあの家に一人で置いておけるだろうか。そろそろ、老人のための施設を探したほうがいいんじゃないか。でも、母親を施設に預けるなんて、できるだろうか。僕は自分が世界で一番汚い人間になったような気分になった。そして、いや、そんなことはできないという結論を出す。こんな自分の中での問答を最近は何度も繰り返している。

そういえば、最近イライラすることが増えてきた。母親の物忘れに何度も怒りをぶつけた。母親はとても小さな声で「ごめんね」を繰り返した。それは、謝っているようにも、イライラしている僕を責めているようにも聞こえた。僕は暗い

気持ちになった。



あの赤い鯉のぼりを最後に見たのは、いつだったろうか。僕が小学校3年生のときに祖父が死んだ。祖父が死んだことで、僕は家族の中でたった一人の男になった。祖父がいなくなって、家では鯉のぼりを上げることも、柏餅を作ることもしなくなった。鯉のぼりは物置の中のどこかにしまわれたままになった。

祖父が死んでからも、母親の毎日はそれほど変わらなかった。毎日決まった時間に仕事に出かけて、特に残業もなくだいたい定時に帰ってくる。祖母と一緒に晩御飯を作って、家族3人で食べる。晩ごはんはなぜか魚とか煮物とかが多くて、子どもの僕には物足りなく感じることがあった。たまに肉が出てくることもあったが、母親も祖母もあんまり食べなかった。僕の皿の上には、一人だけ量の多い肉が載っていて、なんだか僕一人だけが肉を食べているような気分になった。

祖母は僕が高校生のときに死んだ。それから、大学生になって、僕は一人暮らしを始めた。母親とは別々に住むようになったが、母親は1か月に1回は僕のアパートにやってきた。両手いっぱいの買い物袋に肉やら野菜やらを詰め込んで、狭い台所の小さい冷蔵庫をいっぱいにして帰っていった。



僕が51歳になった年の2月のことだ。僕はいろいろと迷ったが、母親を施設に入れることにした。近所の老人のための施設に空きが出たのだ。そこなら、入

るのに必要な費用を、母親の年金で払うことができた。僕が母親をその施設に送って行ったとき、ちょうど梅の花が満開だった。最近、暗い顔をしていることが多い母親だったが、その日は梅の花のいい香りに包まれて、少し明るい顔を見せた。

母親のいなくなった家はずいぶんと静かになった。母親を心配することは少なくなったが、それで僕の気持ちが軽くなりしなかった。僕は一人で夕食を作り、一人で食べ、風呂に入って、すぐにベッドに入った。それは、とても静かな生活だった。

1か月に1回は必ず、母親の様子を見に行った。甘いものが好きな母親だが、最近はある程度食べなくなっていた。いろいろなお菓子を持っていっても、その中の一番小さいのを手に取って、一口食べると、あとはもう口に入れようとしなかった。両手いっぱいのお菓子を持っていっても、結局そのほとんどを僕は自分の家に持って帰ることになった。

その年のゴールデンウィーク。会社は連休だ。僕はゆっくりと身支度をして、母親のいる施設へと向かった。電車の窓から外を眺めていると、いくつかの家には鯉のぼりが上がっていた。僕が子どものころに憧れていた、何匹もの鯉のぼりが連なっている、立派なセットだ。そして、僕は自分の鯉のぼりを思い出した。あの大きな、一匹だけの赤い鯉のぼり。僕はなんだかおかしくなって、笑った。なんだったんだろう、あの馬鹿でかい鯉のぼりは。

僕の家族は、理想的な形じゃなかったかもしれない。でも僕は、あの大きな鯉のぼりのしっぽを体に巻き付けて、遊んでいたころを思い出すたびに、幸せな気分になる。一匹だけだったけど、僕を守ってくれた鯉のぼり。家族を支え続けた、たった一人の母親。

今日は駅前の和菓子屋で、柏餅を買っていこう。母親が一口だけでも食べてくれたら、きっと僕はうれしくなるだろう。

(2725 字)

(2022.8 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.